

新 刊 紹 介

新
刊
紹
介

1. 諡——天皇の呼び名——

野村朋弘著

2. 志度寺縁起絵

——瀬戸内の寺を巡る愛と死と信仰と——

太田昌子編著

3. 足利義視・足利義植文書集

(戦国史研究会史料集 7)

木下聡編

4. 戦国大名武田氏の外交と戦争

(戦国史研究叢書 17)

小笠原春香著

5. 物語 アラビアの歴史——知られざる3000年の興亡——

(中公新書 2496)

都勇造著

6. 独ノ戦——絶滅戦争の惨禍——

(岩波新書 1785)

大木毅著

野村朋弘著

『諡——天皇の呼び名——』

中央公論新社 二〇一九・五刊

四六 二二二頁 一六〇〇円

本書は、なぜ天皇家は存続してきたか、という日本史研究上の大きな課題に対して、諡号制の成立と展開の分析から応えようとする意欲作である。本書の構成・概要は以下の通りである。

はじめに／第一章「天皇家はなぜ存続してきたのか」／第二章「諡号とは何か」／第三章「日本の諡号の種類」／第四章「日本における諡号制度の展開」／第五章「諡号の変容——追号・遺諡の成立」／第六章「南北朝の危機と諡号」／第七章「漢風諡号の復活」／おわりに

第一章では、先行研究に依拠しつつ前近代までの天皇制存続の背景を史的に検討する。まず、天皇の政治的な正統性を支える根拠として、天皇家の祭祀王権の性格を挙げる。また、南北朝期以降の天皇が、武家政権の国家支配に正統性を付与する権威として存在するとし、こうした背景に、天

皇家の文化的優越性があつたと指摘する。

第二章・第三章では、中国・日本における諡号・廟号の成立や変遷、その種別を概観する。諡号は廟号に対し、その治世の評価といった、より公的な意味を有した。易姓革命の起こらなかった日本においては諡号が選択され、国風諡号や追号など、日本独自の諡号制が成立したと指摘する。

第四章では、奈良時代末期から平安時代前期における、二度の皇統交代に着目する。桓武天皇、宇多天皇の両者がともに、自らの皇統の正統性を強調する必要に迫られ、「よく前業をついだ」という意味を持つ「光」の字を、父たる先帝の諡号として贈ったと指摘する。

第五章では、追号の展開及び遺諡の成立を取り上げる。持明院統と太覚寺統に皇統が分立した鎌倉後期にあって、「加後号」が単なる死後の呼び名ではなく、政治的正統性を示すものとして機能したと指摘する。また著者は、鎌倉後期から南北朝期にかけての天皇が、生前に諡(追号)を遺言すること「遺諡」と概念化し、その政治性に注目する。

第六章では、とくに北朝天皇の追号に着目し、各天皇の皇統意識を論じる。南北朝の抗争、さらには北朝内部の後光厳流と崇光流との対立の中で、「光」や「後」の文字が、南北朝・室町前期の天皇の諡字として選択されたと指摘する。

第七章では、江戸時代後期における漢風諡号の復活から、近代における一世一元の制の成立までを論じ、今後の諡号制の展開を見通す。また、おわりにでは、天皇家がいかに続き、変化したかを見通す素材として天皇の諡号を位置づけたところで、筆が擱かれる。

天皇制存続の理由に関しては、近年も様々な議論がなされているが、天皇家の積極的な意図が論じられることは必ずしも多くない。そうした研究動向に在って、日本における諡号制の成立と展開を、天皇家が存続のために行ってきた「弛みない努力、當為」と捉える本書の主張は、議論の裾野を広げることになるだろう。一読をお勧めしたい。

(桐田貴史)

太田昌子編著
『志度寺縁起絵

——瀬戸内の寺を巡る愛と死と信仰と——』

平凡社 二〇一九・五刊

B5 三一六頁 四八〇〇円

中世日本では寺社の霊験や祖師の伝記を絵画化した作品が数多く制作され、今日も大切に伝えられている。それらは巻物の形と大きな掛軸とに大別される。前者の絵巻は、鎌倉時代頃までの作品は、おおむねカラー図版が出版され、国立博物館所蔵分は「e国宝」などのWebサイトから、より詳細に閲覧可能な作品も増えてきた。一方、後者の大幅の作品については、展覧会図録などから集めることで、カラーの全図がようやく揃う段階になった。両者の形態は異なるが、人物などの個別モチーフは、むしろ掛軸形式の作品の方が小さい場合すらあって、研究条件が隔たり、作品研究の水準にもまだ開きがある。

十四世紀を中心に制作された掛軸の縁起絵・伝記絵には、特定の寺社にゆかりの個

性的な作品がある。その代表例が本書の対象となる「志度寺縁起絵」現存六幅で、豊富な物語内容を含む大作である。本書では、冒頭に全幅のあらすじを図解してまとめて掲載し、編者の太田昌子による各幅の絵と物語を詳細に読む章が中心となっている。

各幅は上中下の三段に分割したカラー図版を基本とし、本文中ではおおむねモノクロの部分図を用いて理解を助ける。そして縁起文の現代語訳と、松原茂による縁起文の書誌的検討や、菅原昭英の中世志度寺史をめぐる雄論のほか、毛塚万里・松原潔による関連作品の紹介等を加える。さらに国立能楽堂編『能と縁起絵』（一九九一年）附録冊子を大幅に増補して、縁起文の図版・翻刻・読み下し、本冊に収まらなかった論文・年表・文献目録などを附属CDとする。商業ベースの出版と学術性との折り合いのつけ方の一工夫である。

中心をなす太田による画面の読み取りとそこから広がる議論をこて紹介するのは難しいが、いくつか重要な論点を紹介するのには読み替えて整理しておこう。天地幅の限られた絵巻に対し、大画面説話画では、

物語の世界がパノラマ図として提示されていることに特徴がある。物語の時間的順序よりも、世界観を反映した場面構成がなされ、類型化された場面の型を用いつつ、作品の場固有の地域性（志度および瀬戸内海）が織り込まれる。大画面を細かく場面分割する方法や、景物・モノや人物の姿・しぐさからのイメージ連鎖など、絵画の物語表現（ナラトロジー）が駆使され、観る側の想像力を引き出す働きを備える。大画面は多数の観者の存在を可能とし、それを前にした法会や勧進の場では、語りを共有する空間が現出した。追善供養に帰結させる玉取り説話や、冥途から蘇生した人々の話など、死をめぐる信仰に全体を貫くモチーフがあり、次々と物語を作り出す勧進の働きとともに、そこで増してくるのが地域・人物の實在性のリアリティである。

なお二〇一五年からの修復による成果も部分的ながら反映させ、控えめであるが美術史学における様式的な知見に重要な指摘が含まれている。本年四・五月に香川県立ミュージアムで全幅が一室に展示され、文字通りこの縁起絵の世界を体感したが、六

幅（かつてさらに一幅あった）として成長してゆく過程や、後世の補筆（図様に大きな変更はないが画面を見た印象には強く影響する）を視野に入れる必要性を改めて痛感した。

本書の刊行が予告されたのは、『週刊朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす』五・大仏と鬼（一九九四年四月）の参考文献注と記憶する。平凡社『絵は語る』シリーズ（一九九三年）のブックデザインを踏襲する本書は、ちりばめられた社会史的トピックとともども、どこか懐かしい気分を思い起こさせ、この二・三十年の学術環境の変化や中世史学の関心の硬直化がのしかかって来る。中世絵画作品が備えるポテンシャルを説き、人々に勧進するあり方も、今後の課題として意識せざるを得ない。

（藤原重雄）

木下聡編

『足利義視・足利義植文書集』

(戦国史研究会史料集 7)

戦国史研究会 二〇一九・二
刊
A5 二二四頁 一五〇〇円

本書は、精力的に研究成果の発信を行い続ける戦国史研究会が世に放つ、史料集の第七弾である。室町幕府関係史料に精通する木下聡氏(同会々員)が編者となり、一

〇代將軍の義植(初名は義材、のち義尹、義植と改名、ここでは義植で統一)の発給文書を三四一通、義植の父義視の発給文書を二一通、義植の養子義維の発給文書を三通、義維の子義栄の発給文書二通などを翻刻紹介している。応仁・文明の乱や明応の政変によって、室町將軍権力の分裂が顕在化するわけだが、さながら本書は、「義視系將軍発給文書集」と銘うつことができるだろう。これらのほか、既刊の八代將軍義政発給文書の補遺として二一通、および九代將軍義熙(義尚)発給文書の補遺として三通を収める点も付言しておく。

義植は、政変などによって京から没落す

る中、復権を目指して越中、越前、周防、さらには淡路や阿波など諸国を流浪した室町將軍、いわゆる「流れ公方」として知られる。波乱に富んだ彼の生涯を把握するうえで、こうして発給文書を編年順に通覧できるようにになった意義は大きい。その史料収集の範囲も幅広く、編者の労苦を推し量ることができる。

そもそも義植発給文書の基礎的な研究は無かったこともあり、はしがきの解説も見逃せない。花押形の変遷について、延徳二年(一四九〇)から明応八年(一四九九)三月まで、同年一月から永正四年(一五〇七)頃まで、永正六年から没年の大永三年(一五二三)まで、大きく三段階に分かれる点を浮き彫りにした成果は貴重だ。新たな年欠の義植発給文書に接した際には、年次推定の確かな指針となるだろう。また、花押を改める背景について、明応八年の大内氏分国(周防)への没落、永正五年六月の入京ないし翌月の將軍復職に求めている。妥当な見解だと思う。ちなみに、花押を改める時期と名を改める時期とは異なるとも説く。

一方、義維と義栄の発給文書に至っては、僅少なことから十分に認識できていなかった。そのような状況のもと、先行研究もふまえながら細羅的探索を経た本書によって、現状確認しうる点数とその中身について、学界で共有できるようになったことも重要である。まさしく今後の研究の出发点となる仕事と評せよう。

また、翻刻のスタイルも好感が持てる。例えば、史料本文は追込みを原則とするが、日付や署判、宛所の書き出し位置に関しては、原文書を忠実に反映させているという。これは、既知の文書についても、可能な限り原本(ないしその写真帳や影写本など)によるチェックを経たからこそ成しうることだ。その作業をできなかった史料には※印を付して、読者に断っている点も誠実であろう。

近年の戦国期室町幕府研究の盛況は周知の通りだ。本書は、そのさらなる推進力となるにちがいない。筆者も手元に置いて存分に活用したいと思う。発行部数は限定四五〇部の由。ご入用の方は急ぎ手に入られることをお勧めする。

(萩原大輔)

小笠原春香著

『戦国大名武田氏の外交と戦争』

(戦国史研究叢書 17)

岩田書院 二〇一九・四刊

A5 三七〇頁 七九〇〇円

戦国大名が対外戦争を展開するメカニズムを「外交」という切り口から考察した一書。甲斐・武田氏を中心に、武田氏と領域を接する関東・中部・近畿の諸勢力との関係に着目し、大名の領国支配における外交・戦争の意義の解明を試みる。

序章「戦国大名の外交と戦争に関する研究と課題」では、戦国大名の外交と戦争、甲斐・武田氏の外交と戦争に関する先行研究を整理し、武田氏初期の外交の軸となる三國同盟、信玄期以降の武田氏と織田・徳川両氏との関係、大名の外交・戦争における国衆の存在に注視する。

第一部「大名の外交・同盟」では、武田氏外交のうち同盟に発展した三事例を取り上げ、交渉の推移や同盟の意義を論じる。第一章「武田信虎と今川・北条氏」では、信玄の父信虎段階における外交と軍事行動

の展開を論じ、信虎による甲斐統一が果たした外交上の意義と、そのために軍事行動を重ねたことが信虎退放に至ると指摘。第二章「武田氏と石山本願寺」では、当初個人的な友好関係にあった両者が、後に上杉氏、さらに織田氏を共通の敵とした軍事同盟に発展し、織田氏もその連携を断つことが必要になったとする。第三章「武田・織田同盟の成立と足利義昭」では、武田・織田同盟に両者の境目の国衆・遠山氏が不可欠の存在であったと指摘。同盟により武田氏は足利義昭を支持する立場となり、自身の外交・軍事上有利になる局面で義昭の権威を活用したとする。

第二部「大名間の戦争」では、信玄期・勝頼期における戦争として、駿河侵攻、三増合戦、徳川氏との戦争を取り上げる。いずれも同盟関係の破綻を契機とする点で共通しており、その考察によって大名による戦争の一側面に迫る。第四章「武田氏の駿河侵攻と徳川氏」では、武田氏による駿河今川領国への侵攻に、足利義昭・織田信長との同盟関係が大きく作用し、徳川氏とも当初は協力関係にあったが、侵攻の過程で

関係が悪化したと指摘。第五章「武田氏の小田原侵攻と三増合戦」では、北条氏と争った相模三増合戦について、武蔵・相模への勢力拡大が目的ではなく、駿河における北条氏の兵力を分散させる陽動作戦と評価する。付論「武田氏の小田原侵攻における放火と進軍経路」では、武田氏の小田原侵攻が北条領国内の鄉村・寺社に大きな損害を与えたことを論じる。第六章「駿遠国境における武田・徳川両氏の戦争」では、信玄晩年の軍事行動から高天神城陥落に至るまでの両者の攻防を整理し、外交の推移が戦況に大きく影響したことを指摘する。

第三部「大名の戦争と国衆」では、大名間の戦争に境目国衆の動向がどのような影響を及ぼしたか、特に武田氏と織田氏・徳川氏の境目に位置する国衆を素材に論じる。第七章「武田氏の東美濃攻略と遠山氏」、第八章「元龜・天正年間における武田・織田間の戦争と東美濃」では、武田・織田両氏の境目国衆・遠山氏が両属の立場を取ることで、両氏の同盟関係に大きく関与したと、織田氏による遠山氏家督への介入が、遠山氏の織田氏からの離反と、武田・織田

同盟破綻をもたらしたことを論じる。第九章「美濃国郡上安養寺と遠藤氏」では、美濃郡上の一向宗寺院安養寺と国衆遠藤氏が密接に関わりながら地域支配を展開するとともに、同寺が遠藤氏と織田氏との関係にも影響を及ぼしたと指摘。第十章「武田・徳川両氏の戦争と高天神城小笠原氏」では、遠江で武田氏と徳川氏の境目に位置する国衆小笠原氏の事例から、国衆の家中分裂や大名による軋封措置など、境目国衆の存在形態の特質を論じる。

終章「戦国大名の外交と戦争―甲斐武田氏を事例として―」では、戦国大名が外交・戦争を展開した要因に、將軍の停戦令が機能せず、大名独自の外交・軍事により平和を実現する必要があったと指摘。武田氏の外交・戦争は、戦国大名という地域国家の権力体による政治的手段の典型と評価する。そして將軍に代わる戦争停止・抑止権力として織田氏が台頭したことで、武田氏は滅亡への途を辿り、その流れは羽柴秀吉による北条氏征伐へ続く位置付けた。

近年、戦国大名の軍事行動を外交や国衆の動向から読み解く試みが盛んであり、本

書はその専論として貴重な成果である。また織田権力に関する議論も深められているが、本書も武田氏と織田氏との関係を多く論じており、戦国・織豊期研究に広く資する一書となるだろう。(海老沼真治)

部勇造著

『物語 アラビアの歴史―知られ

ざる三千年の興亡―』

(中公新書 2466)

中央公論新社 二〇一八・七刊
B40 四〇〇頁 一一〇〇円

本書は中公新書「物語〇〇の歴史」シリーズのアラビア編である。先イスラーム期の南アラビアを専門とする著者がアラビア半島を取り巻く国際環境の変遷を踏まえつつ、長年の研究蓄積をもとにアラビアの三千年に及ぶ通史をまとめ上げた。全八章のうち四章分がイスラーム前史に充てられ、特に各王朝の興亡を核として多数の碑文史料を紹介している点、およびイスラーム勃興の要因について独自の見解が展開されて

いる点が画期的である。

第一章「都市と国家の成立と発展」はメソポタミア・エジプト両文明の影響を受けた南アラビアにおける諸王国の誕生について説明する。隊商交易の活性化により文字が伝播し、紀元前二千年紀には「海の民」の侵入の余波でサバア族が南下し、南アラビアの覇権を握った。第二章「新旧勢力の交替と文明の変質」ではアレクサンドロス大王の東征に始まるヘレニズム時代がアラビアに与えた経済的影響を論じる。香料の道の衰退と新交易拠点の誕生を経て、一世紀になるとペドウィンの攻勢とギリシア商人の参入によりアラビアの政治・経済・文化の中心が内陸オアシス地帯から南西部の高地へ移行した。第三章「オリエント世界の三極構造化」は三世紀から七世紀のオリエント世界の中心部に割拠した三勢力、ローマ帝国・ササニ朝・アクスム王国とアラビアとの関わりを描く。アクスム王国は南アラビアを間接支配し、ササニ朝とローマ帝国は北アラビアの諸隊商都市を併合しようとした。第四章「アラビアの古代末期」はイスラーム形成の素地につい

て考察する。ユダヤ教徒の離散が多神信仰の地アラビアに一神教をもたらし、ローマ帝国内の教派対立がアラビアにおけるキリスト教の布教活動を促したため、両者の対立もみられた。

第五章「イスラームの誕生と発展」はイスラームの誕生と発展を概観する。著者の主張によると、度重なる対異民族戦争と異民族支配の末に救世主を待望する気運が高まり、旧約思想と在地要素が融合するかたちでイスラームが誕生した。新生のウンマは遊牧勢力の機動力と地理的条件を生かし、權威維持のために征服活動を続けた。第六章「沈滞と混沌の数百年」はムハンマド死後の混沌について述べる。征服活動の停滞への不満から二度にわたる内乱が勃発し、イマーム・マフディー両概念の導入と改宗者の権利保障への動きが見られた。アッバース朝では有能な外国人官僚の登用が進む一方で辺境と化したアラビアではイスラームの非主流諸派が勢力を拡大した。地中海・インド洋では交易が復活し、交易路の結節点イエメンや沿道ヒジャーズが香辛料貿易で繁栄を取り戻していった。第七章

「ヨーロッパ人の来航とオスマン朝の支配」は大航海時代以降のオスマン朝とヨーロッパの関係を紐解く。オスマン朝は海上覇権を賭けてポルトガルをはじめとする西洋諸国と対峙したほか、陸上ではサファヴィー朝の再興に伴いアラビアに対するオスマン朝の影響が抑制されたことでサウード家など在地勢力が独立した。一九世紀には産業革命を経て勢力を伸ばすイギリスにより湾岸諸国の保護領化が進められた。第八章「独立と繁栄」は列強の植民地戦争から大戦期を扱う。第一次大戦後のアラブ国家建設が叶わない混沌状態の中、サウディアラビアが覇権を確立し、第二次大戦後には各国が現代へと歩を進めていく。

アラビア半島を取り巻く国際環境の変遷を確かに把握しつつ、イスラーム成立前後のアラビア史を一連のものとして俯瞰した本書は、中東史の包括的理解に資する内容を十分に備えた好著である。(永田真子)

大木毅著

『独ソ戦』

——絶滅戦争の惨禍——

(岩波新書 1760)

岩波書店 二〇一九・七刊
B 40 二七〇頁 八六〇円

本書は、欧米の先行研究にもとづき、ドイツの動きを中心に独ソ戦の軍事的側面を描く。著者によると、ドイツにとって、この独ソ戦とは、目的を達成し講和で終結する「通常戦争」ではなく、人種主義にもとづき植民地帝国の建設をめざす「世界観戦争」と、敵を殲滅する「絶滅戦争」を複合した戦いであった。

各章は一貫してドイツからの視点に立って構成されている。第一章「偽りの握手から激突へ」では、一九四一年六月にヒトラーとドイツ国防軍が対ソ戦に踏み切るまでの経緯が検証される。「バルバロッサ」作戦について、目標の優先順位の曖昧さや部隊の過剰な負担、兵站の困難など、いくつかの欠陥が指摘される。第二章「敗北に向かう勝利」では一九四一年七月のスマレ

ンスク会戦を中心に、独ソ両軍の戦略や兵站機能が説明される。ソ連軍は甚大な兵力を喪失し、ドイツ軍も快進撃に反して窮状に陥っていたことが明らかになる。

第三章「絶滅戦争」で提示される独ソ戦像が、本書の主眼であるといえよう。筆者の論によると、独ソ戦は、当初、「通常戦争」「収奪戦争」「絶滅戦争」が並行する複合的な戦争であったが、やがて「収奪戦争」と「絶滅戦争」の色彩が強まり、「通常戦争」の基本にあった軍事的合理性が後退していった。

第四章「潮流の逆転」では、一九四一年末から一九四三年一月のスターリングラード会戦と一九四三年七月の「城塞」作戦を中心に、泥沼化するドイツ軍の状況と、独自の「作戦術」にもとづいて反攻に成功していくソ連軍のさまが対照される。用兵思想についても、歴史的経緯を含め詳細に記述される。第五章「理性なき絶対戦争」は、一九四三年夏のソ連軍によるハリコフ突入から一九四五年四月のベルリン陥落までの時期を扱う。ドイツ軍が展開した焦土作戦では、軍事的合理性にもとづく作戦と収奪

戦争の要素が戦争犯罪に帰結した。終章「絶滅戦争」の長い影」では全体を総括し、後世における独ソ戦の扱いが端的に触れられている。

本書は、作戦の歴史を政治指導者や高位の軍人を軸として描くことで、独ソ両軍の戦略上の欠陥を浮き彫りにする。「マルクス・プラン」から「青号」作戦まで、ドイツ軍の作戦がいかにずさんであったかを詳らかに論じる一方で、ソ連軍も大テロルで人材が不足していたと指摘する。センノ戦でソ連軍の司令官、軍団長、師団長の平均年齢がドイツ軍より一歳若かったという話は、興味深い。

一方で、国防軍の作戦立案上の役割を論じるならば、作戦の採用過程でなぜヒトラーの意向が優先されるに至ったのか、ヒトラーと国防軍の関係における構造上の要因について、もう一步踏み込んだ議論が欲しい。第二次世界大戦は世界戦争であったにもかかわらず、米英仏の動きが独ソ戦の経過にどのように影響したのかについての言及も限定的である。ユダヤ人や捕虜の扱いに関する記述はあるものの、帯にあるよ

うな「地獄」の様を描くならば、社会、文化、心性の側面、一般兵士に関する最新の研究や、ジェンダー面にも触れられるべきである。

本書は戦況の局面ごとに地図が掲載され、数多くの作戦や戦闘が時系列順かつコンパクトにまとまっているという点で、独ソ戦の入門書としての役割を果たす。読者は戦闘の経過を理解し、軍事行動の地理的なイメージを描くことができる。独ソ戦に関する基礎知識を得る上で、重要な書である。

(松本祐生子)